

雄勝石の工芸文化を

伝えよう

2億5千万年の時を経て今もなお未知なる可能性を秘めた石、雄勝石。その雄勝石の今日に至るまでの歴史をたどりながら、私たちが誇れる伝統工芸の文化と伝承について考えてみましょう。



▲ 硯を彫る雄勝硯伝統工芸士の高橋仁夫さん
雄勝石は「玄昌石」ともいわれ、石肌は滑らかで発墨が良く、硬からず柔らかからず中国の名硯「端溪石」の特徴を具備し、名硯「雄勝硯」として全国に知られています。



▲ 日本一の硯
(雄勝硯伝統産業会館所蔵)

歴史の重みを 今に伝える「雄勝硯」

「雄勝硯」の歴史は古く、約600年以上も前の室町時代にその端を発しています。

元和年間（一六一五〜一六二四年）には、仙台藩祖伊達政宗公に雄勝硯を献上し賞賛されたと言われています。二代忠宗公は硯師を仙台藩お抱えとし、硯材を産出する山を「お留山」と名付けて、原石の採掘を一般に許可しなかつたとされています。

昭和49年10月2日には、伊達政宗公のお墓である瑞鳳殿再建の際に副葬品の中から雄勝硯が発見され、政宗公が雄勝硯を愛用していたことがうかがえます。また、明和年間（一七六四〜一七七二年）の「封内風土記」には、当時雄勝浜に雅物としての硯が産出され、名硯として名が広まっていたことも明らかにされています。

昔より名硯として伝統と技術が受け継がれてきた雄勝硯は、わが国が誇る伝統的工芸品として昭和60年5月に国の伝統的工芸品の指定を受けました。戦後の最盛期には約200人いた工人が、現在では11人にまで減少しており、高齢化にも直面しています。

このような状況を深刻に受け止め、雄勝硯生産販売協同組合が中心となり、雄勝硯振興計画を策定し、地場産業の振興に努めているところです。跡継ぎがないという産地の切実な

悩みを解決するための「後継者育成事業」もそのひとつで、硯組合では、若者と特産品の接点を増やそうと、中学生を対象にした硯製作技術の指導に工人を派遣しています。

天然スレートとしても 貴重な「雄勝石」

明治初期には、学校教育の普及にともない、全国の学童用品として石盤の需要が高くなりました。雄勝石は石盤としても製造され、硯の産地が、一躍石盤の主産地ともなりました。

また、明治20年ごろから雄勝石は、屋根葺用の天然スレートとしても使い始められ、宮内省をはじめ銀行や商社などの高級建築物の屋根材として利用されました。

現在の東京駅や旧北海道庁などがその建物です。重要文化財の東京駅の屋根は、まもなく創建当時の3階建に復元されます。



▲ 雄勝町のスレート工場



▲ 学童用品の石盤



▲ 天然スレートが使われている東京駅

硯を使った授業が好評です

雄勝中学校では、選択美術で雄勝石を使った授業が行われています。昭和56年に伝統工芸の後継者育成事業の一環として発足した「硯彫クラブ」が現在も選択授業の中で取り入れられています。2、3年生のたて割り授業として週一時間、工人を招いて、硯や表札、ペーパーウエイト作りをしています。

生徒達は、雄勝石の原盤からの作業工程のすべてを実演で教えてもらうので、巧みの技におどろいたり新しい発見をしたり、興味深く授業を受けています。担当の瀬戸先生は「授業を行うようになってからは、以前より伝統文化を身近に感じて、硯に愛着を持ってきています。また、硯工人が少なくなっていくのが寂しいと思っています。私も雄勝石に魅力を感じているので、ストーンアートなど硯と違う題材で、生徒達の想像力と感性を伸ばしていきたいと思っています。」と熱く語ってくれました。



▲雄勝中の選択授業



▲生徒の作品

雄勝硯伝統産業会館に行ってみよう

国内唯一の硯の展示施設で、雄勝石の採掘の様子や雄勝硯の製造工程などをさまざまな形で紹介すると共に、全国・海外の硯も展示しています。雄勝硯の歴史や文化または、人と硯の関わりを知る事ができます。

常設展示のほか、企画展や各種イベントを開催しています。特に、10月開催の東北書画展や11月開催のアート・オブ・ストーン展は必見です。



▲東北書画展



▲故人銘硯コーナー



▲アート・オブ・ストーン展

雄勝硯伝統産業会館

雄勝町雄勝字寺53-1

☎57-3211

良質の石と

工人の技術に感謝

近ごろ、専門家の間でも玄昌石（雄勝石）が見直されています。昔から多くの原石を採掘しており、現在の地層から採れるものは大変質が良く、書家の間でも多く愛用されています。

硯の良し悪しは、石質と鋒鋳（ほうじゆ）で決まるとされています。石質は石の硬さ、鋒鋳は墨をする面の状態（大根おろしのギザギザ）で、石が硬すぎても、鋒鋳が荒すぎてもだめです。高級品で知られる中国の端溪硯は、墨のすり味が滑らかなんとも言えない感触です。書くことに加え墨をすることも楽しんでいきます。

最近の雄勝硯は、端溪硯に引けを取らない良質な硯が作られています。良質の石と工人の高度な技術に感謝し、伝統工芸文化を大事にしたいと考えています。日本を代表する硯として書の道から雄勝硯を広めていきたいと思っています。



河北書道展特別顧問

書家 山崎 晃 秋さん

地元の自然素材に

目を向けよう



一級建築士

小杉 淳さん

地元で取れる石や木を材料として自分の家を作りたいと以前から思っていました。工業製品にはない素材感や色、雰囲気があります。全ての外壁に雄勝スレートを使用しました。現代の建築技術と、スレートの素材をミックスすれば、耐久性やデザイン性をバランスよく表現できると考えています。これから益々研究が進めば、もっと面白い使い方ができると思います。また、長い間伝承されてきた技術は、今は文化財の修理などでも使われていない状況なので、一般住宅でも多く取り入れられればとの思いもあって使用することにしました。

いつの日にか、壁をスレートで巻いて、屋根を北上のヨシで葺く「石巻の家」をたくさん作ってみたいのです。スローフード運動では、地元の食材を見直す運動が高まっています。素敵な地元の自然素材にも目を向けていきたいです。